

# 丁寧体基調の会話における普通体への スタイルシフト

佐藤 竜

## 1. はじめに

日本語には、待遇レベルの上で明確に区別されるスタイルとして、丁寧体と普通体の対立がある。<sup>(1)</sup> これらスタイルの選択によって会話の丁寧度が左右されることから、同一会話内における同一話者に対しては、原則として同じスタイルを維持することが期待される。しかし、実際の会話では、丁寧体と普通体を混在させる発話、すなわちスタイルシフトの使用が度々見られる。本稿では、スタイルシフト生起における要因を分析の対象とし、シフト生起のメカニズムについて考察していく。

## 2. 先行研究

### 2.1. 先行研究の概観

スタイルシフトの研究は、各々の研究者がそれぞれの研究目的に基づいて用語を使用している傾向にあることから、用語の捉え方やニュアンスの差異によって、恐らく意図的に使い分けがなされている場合が多々ある。本章では、各先行研究で用いられている用語を極力そのまま引用することにし、本稿で使用する用語と対応するものについては後述する。

三牧(1993)は、対談番組を対象とした分析から、談話の展開標識として、「新しい話題への移行」「重要部分の明示」「注釈などの挿入」の機能を果たすことを指摘した。敬語レベルの分類を、語レベルと文体レベルの二側面から判断することで、待遇レベルの細分化を図ったという点に特徴がある。シフトの方向は、0方向(親密表現)でも、+方向(疎遠表現)でも、談話の展開標識としての三つの機能を同様に果たすとし、シフトの頻度が決定される要素としては、人間関係(年齢差、親疎等)や話題の性格が関与することを論じた。

酒井(2015)は、先輩と後輩による、親しい間柄における二者間での会話を対象に、スピーチレベルシフトが生じる場面とその効果について分析した研究である。シフトが生じる場면을、言語的要因と心理的要因の大きく二つに分類するこ

とで、シフトの効果についてそれぞれ傾向を示している。特に、後輩による普通体へのシフトでは、意見や指摘など主張を示す場面に生じることを述べた。効果としては、相手の発話に対する応答を普通体にする事で、相手が話しやすいようにする効果があり、またスピーチレベルを下げることで冗談だと相手に認識させて心的距離の短縮を図ることができると結論付けた。

陳(2003)は、同年代二者間による「デス・マス体発話」を基本レベルとする会話のうち、「ダ体発話」へのシフトに着目し、生じやすい状況とその頻度について分析した。先行研究におけるシフトの「機能」と「条件」について、研究者によって用語の使用に揺れがあることを指摘し、自身の分析ではここに明確な線引きをしたという点に特徴がある<sup>(2)</sup>。ダ体発話へのシフトを、(1)情報の受信を示す時、(2)情報の整理を表す時、(3)感情の表出を行う時、の大きく三つの状況に分類し、さらに八つの下位分類<sup>(3)</sup>に細分化した。そして、それらシフトの出現頻度はそれぞれ異なることを述べた。

また、フォローアップ・インタビューの結果から、①多くのシフトは無意識的なものであり、シフトされる側も違和感を抱いていないこと、②両話者ともシフトは親しみの表示、話しやすい雰囲気醸成であると受け止めていること、が確認されたことによって、従来から指摘されてきた「親しみを表す」機能を裏付ける結果となった。

宇佐美(1995)は、談話内におけるスピーチレベルシフトに着目することによって、談話レベルから見た敬語使用のメカニズムについて解明した研究である。初対面でなされる大学生活や海外生活の談話に限定することで、ブラウン&レヴィンソン(1987)のフェイス侵害行為(F T A)におけるフェイス・リスクを構成する三要素である、「力関係(P)」「社会的距離(D)」「負荷度(R)」のうち、後者二つを一定に保った状態で調査された。また、「目上」「同等」「目下」の対話者を男女別に割り当てることによって、力関係を大きく三段階に分類し、さらに同性であるか異性であるかの違いについても着目している。

収集された談話を、言語的・心理的要因(ローカル要因)と社会的・文化的要因(グローバル要因・年齢、社会的地位、性など)の二側面から分析した結果、丁寧体から常体へのシフトでは、ローカルな要因がシフトを生じさせる直接的な原因になっているのに対して、グローバルな要因は、シフトの頻度を規定するという形で間接的に関与するのだと指摘した。ローカルな条件としては、①心的距離の短縮、②相手の一レベルに合わせる時、③ひとりごと、自問をする時、④確認のための質問、或いは、答えをする時、⑤中途終了型発話の時、の五つを挙げ、グローバルな影響としては、男女ともに目上や異性との談話において常体へのシフトが少ないことを明らかにした。

伊集院（2004）は、日本語母語話者によるスピーチスタイルの選択について、母語場面と接触場面の対比から分析し、両場面のスピーチスタイルシフトの過程にどのようなメカニズムが働いているのか、ブラウン&レヴィンソン（1987）のポライトネス理論を用いて考察したものである。全ての会話データにおいて、ブラウン&レヴィンソン（1987）が定義したFTAの度合いを同一にするため、P、D、Rの初期値が一定になるよう設定されており、Pは同年代、Dは初対面、そして初対面場面で親しくなるために会話をする事自体がRになる、というようにそれぞれ位置付けた。

分析の結果から、母語場面で見られたダ体へのシフトの要因は、共通話題や共感によるDの減少であり、接触場面におけるダ体へのシフトは、RやPの減少が主要な要因になると指摘された。特に、接触場面におけるRの減少は、母語場面で強く見られた日本語の規範意識（丁寧に話すこと）が希薄になったこと、Pの減少は、母語話者対学習者という構図のもと、敬語体系の複雑さや非母語話者に対するステレオタイプの見方から、「デス・マス体の話し方は非母語話者には難しいだろう」との判断によるものと述べられている。また、日本の規範を意識しなくてもいい接触場面においては、文化に属するRを低く設定できることから、母語場面におけるRの重みが顕著になったとも指摘されている。

## 2.2. 先行研究における問題点と本稿の立場

先述した用語の使用について、先行研究と筆者の分析とを対応させるにあたり、本稿では用語の統一化を図って論述していく。用語の使い分けには、各研究者の捉え方に基づく使用意図があることは承知の上、筆者が使用する語と意味的に相違がないと判断したものについては用語を統一して使用していくことにする。

<u>先行研究で使用されている用語</u>	<u>本稿で使用する用語</u>
スピーチレベルシフト／スピーチスタイルシフト	→ スタイルシフト <sup>(5)</sup>
ダ体／常体	→ 普通体
デス・マス体	→ 丁寧体
基本レベル	→ 基調スタイル（レベル）

三牧（1993）や酒井（2015）は、シフトの果たす機能や効果について述べた研究である点において類似している。三牧（1993）は、シフトの頻度が決定される要素について補足的に述べてはいるものの、人間関係や話題の性格といった要素が、シフトに対してどのように作用するかについては深く触れていない。これはあくまで、シフトが持つ談話の展開標識としての機能に着目した研究であるとい

う特性上の問題であり、三牧（1993）を参考にシフトの機能や効果について論じた研究は多い。また、酒井（2015）は、シフトを場面ごとに分類することで、各場面におけるシフトの効果について論じているが、シフトしたことで起きた効果とシフトを引き起こす要因とが混同している印象を受ける。

陳（2003）や宇佐美（1995）は、シフトの生起する条件や状況について述べた研究である点において類似している。特に、陳（2003）による従来の先行研究への指摘は、酒井（2015）において筆者が示した指摘に類似する内容であるように感じられるだろう。しかし、シフト生起の状況を「～する時」でまとめる陳（2003）の方法は、一見シフトを生起させる条件について述べているように感じられるが、シフト時における会話の内容について述べているに過ぎないとの指摘もできる。

宇佐美（1995）や伊集院（2004）は、ブラウン&レヴィンソン（1987）のP、D、Rをそれぞれ考察に用いている点において類似している。宇佐美（1995）による、ある統制された要因に応じた、言語行動の変容に着目する方法は、個々の要因の働きを一つずつ明確にしていくには有効な手段であると思われる。しかし、いかなる状況（P、D、Rの統制がなされていない会話）においてもシフト生起の可能性は考えられるという推測のもと、そうした様々な状況下における会話データを分析することで、シフトを引き起こす際に最も優位に働く要因について傾向を示すことができるのではないかと筆者は考える。

また、伊集院（2004）は、現象の記述に終始せずに、体系立てを行ったという点に特徴がある。P、D、Rのいずれかがシフト生起の要因となることについては、すでに複数の議論がなされているものの、シフトの機能や効果についての研究に比べると、管見の限りではやや少ない印象を受ける。中でも、PやDがシフトに及ぼす影響について指摘した研究は多いが、特にRについて論じられている点には興味深い。

しかし、伊集院（2004）の示すRは、ブラウン&レヴィンソン（1987）の文化的側面を持つRであるため、母語話者を対象にした会話分析におけるRが総じて高いと認めることに繋がってしまう。さらに、伊集院（2004）は、時間の経過とともに、スタイルが丁寧体から普通体へと「全体的にシフト」する過程を「丁寧体の使用率」の変化に着目して分析した研究であることから、先に挙げた四つの先行研究や筆者の扱う一時的に生じるシフトに着目した研究とはその性質が異なる。つまり、一時的シフトについて、その都度シフトを取り上げるのであれば、Rについてもその都度文脈から取り出す必要があると考える。また、「親しくなるために会話をする」こと自体がRになると述べられている点についても、親密さを表すのはDであることから、ここにDとRの混同が一部見られるのではない

だろうか。

最も重要な問題点の一つとして、先行研究ごとにシフトの定義が異なることが挙げられる。先述した先行研究のうち、一時的なシフトを対象とした研究（伊集院2004を除く）におけるシフトの定義についてそれぞれまとめると、酒井（2015）は、基調レベルからの逸脱をシフトとして位置付けており、尚且つシフト後のレベル継続についてもシフトだと認識している。陳（2003）も、基調レベルからの逸脱をシフトだとする点では、酒井（2015）と共通するが、シフト後のレベル継続をシフトとして認めていない。対して宇佐美（1995）は、直前レベルからの逸脱をシフトとして位置付けている<sup>(6)</sup>。三牧（1993）においては、その曖昧さが最も顕著に表れており、基調レベルからの逸脱及び直前レベルからの逸脱の両者がシフトとして混在しており、明確な定義付けがなされていない印象を受ける。

以上の問題点を踏まえ、本稿では、三牧（1993）や酒井（2015）をはじめとした、シフトが果たす機能や効果についての先行研究とは区別する形で、シフト生起に関わる「要因」を分析の対象として取り上げることで、シフト生起のメカニズムについて考えていく。

分析の対象となる会話データは、全て実際の自然な会話例であり、場面や内容について一切の条件や時間の制約を設けず、話者の年代や性別についても限定していない。つまり、ブラウン&レヴィンソン（1987）におけるP、D、Rの統制を図らずに収集された会話データを使用するという点において、宇佐美（1995）や伊集院（2004）とは異なる。

また、一時的シフトについての分析では、ブラウン&レヴィンソン（1987）の「文化的側面を持つR」ではなく、「文脈に依存したR」に着目していく必要があることは先に述べた通りである。文脈に依存したRであれば、各文脈において等しく取り出すことができると同時に、さらにRを大まかな一括りの概念としての「高/低」のいずれかに分類することで、統制されていない会話データでも同一線上で比較することが可能となる。

Rを判断する要素としては、体力や気力等の内面的要因からなる負担と、時間や金銭等の外的要因からなる負担とを適宜使い分けていくとともに、行動の内容からも考えていく。また、Rの高さは話者の「見なし」が大きく関与することから、本稿におけるRとは、全て話し手による解釈が伴う「見なし負荷度」として分析に用いることにする<sup>(7)</sup>。

シフトを判定する基準としては、会話においてそれまで継続されてきた基調レベルからの一時的逸脱にこそ、フェイス・リスクの計算が強く表れているであろうとの推測から、「スタイルシフト」とは、同一話者に見られる基調レベルからの逸脱のみを指すことにする。よって、シフト後に基調レベルへ戻る現象は、シ

フトとして捉えない。また、シフトされた状態の発話が継続した場合については、ターン内におけるレベル継続も、ターン終了後のレベル継続も、基調レベルからの逸脱という観点からはシフトと判断できるが、本稿ではスタイルが切り替わる要因について探ることを目的とすることから、最初にシフトした一文を最重要視した上で分析する。なお、前後の文については考察の必要性に応じて適宜論述する。

### 3. 考察

本稿では、文脈的な見なし負荷度に着目して考察していくことは先に述べた通りである。そして、会話データにおいてシフトが確認された事例は大きく二分される。まず一つは聞き手の負荷度が関与するシフト、もう一つは話し手の負荷度が関与するシフトである。さらに、前者は感情の表出、後者は情報の提示を行うもの<sup>(8)</sup>に細分された。

文中における記号は、原則としてザトラウスキー（1993）を参考に付したものである<sup>(9)</sup>。なお、話し手と聞き手の位置付けは、話し手とはシフトを起こした発話者を指し、聞き手とはその発話が向けられた人物を指すことにする。

#### 3.1. 感情の表出 — 聞き手の負荷度が関与するシフト —

感情の表出は、さらに「ポジティブ」と「ネガティブ」の二種類に分類できる。

##### (1) 感情（ポジティブ）

- 1 S I ここ、○／／○○
- 2 D Y ん？
- 3 S I (0.6) ○○○でいいんですか？
- 4 D Y (1.2) そうそう
- 5 S I よかった一、間違えたかと思った

- ① 話題：小学生対象の夏合宿にて、参加児童の名前読みについての質問及び返答
- ② 話者：S I = 後輩・先生（女性）10代後半  
D Y = 先輩・先生（男性）20代前半  
・S I からD Y へのスタイルは、丁寧体が基調となる。

この場面では、質問と返答によって会話が成立している。シフトが起きた箇所からは、感情の表出が窺える。ここで、負荷度の所在について考えていく。感情

に関する負荷度について説明すると、感情が表出するということは、話し手S I側に何か特別大きな感情の変化が生じることが前提となる。ここでは、聞き手D Y側の返答という行動がS Iの感情に強く働きかけたのであるから、D Yの行動に要する負荷度を算出する必要がある。

次に、負荷度の高さについて見ていく。ここでの質問と返答は、S Iの持てる知識を質問内に提示することで、質問に対する答えをYes/Noの二択にまで絞っている。一般的に考えられる質問と返答の形式では、質問によって答えの単語を引き出すことを目的とすることから、その性質が少し異なる。答えをYes/Noの二択にまで減らしているという点では、D Yへの配慮が見られることから、S Iの視点からはD Yの負荷度を低下させている。質問の仕方によっても負荷度は低くなっているが、根本となる質問の内容についても負荷度は低いと言える。返答するD Y側は先輩という立場上、後輩である質問者S Iに比べて経験値が高いことから、その知識量の違いが指摘できる。D YはS Iに知っている知識を伝えるだけで良いのだから、S Iから見たD Yの負荷度も当然低いものとなる。

以上をまとめると、聞き手D Y側の負荷度が低いという状況下において、話し手S Iにとってプラスの価値がある（期待通りの）返答を受けた場合に、そのポジティブな感情がシフトを伴って表出されたと言うことができる。

## (2) 感情 (ポジティブ)

- 1 MS やりたくない?
- 2 AT (1.1) ちょーやりたいんです／／けどー
- 3 MS いいよいいよ、SA先生もやっちゃん
- 4 SA え、いいんですか?
- 5 SA (0.6) 持ってます?
- 6 MS あ、ある／／よ
- 7 SA やった、じゃあ
- 8 SA (1.2) AT AT、やってこようぜ、俺らも

- ① 話題：キャンプファイヤー広場にて、手持ち花火の有無についての質問及び返答
  - ② 話者：MS = 上司 (男性) 20代後半  
AT = 部下 (男性) 20代前半  
SA = 部下 (男性) 10代後半
- ・ SAからMSへのスタイルは、丁寧体が基調となる。

シフトが見られる感情「やった」を引き起こした原因は「花火があった」ことだと言える<sup>(10)</sup>。質問の形式としては、返答の選択肢は Yes/No の二択であり、(1)と同様である。つまり、聞き手MSの負荷度は質問の形式的に低いと言える。また、質問の内容についても、調査等を要する難問ではないことから負荷度の低さが確認できる。

ここでも、聞き手MSの負荷度は低いと話し手SAが認識した上で、SAにとって良い内容の返答がMSによってなされたことからシフトに繋がったことが分かる。

### (3) 感情 (ネガティブ)

- 1 YK ごめん、埋もれてた {バドミントンの対戦用紙を見せる}
- 2 NY (1.6) もう最悪—
- 3 YK 早く言ってよ
- 4 NY (0.6) いや、全然呼ばれないから／／秘密兵器なのかなって
- 5 YK {笑い}
- 6 NY じゃあ、来週増やしてくださいよ
- 7 YK (0.3) わかった、来週連続で出してもらうから

① 話題：体育授業中、試合がなかなか組まれなかったことに対する理由説明

② 話者：YK=教員 (男性) 30代後半

NY=学生 (男性) 20代前半

・NYからYKへのスタイルは、丁寧体が基調となる。

前出の例と同様にシフトが起きた箇所、感情の変化が起きた瞬間の文脈に着目していく。シフトの原因としては、対戦表が他の書類に「埋もれていた」ことが関与していることが分かる。よって、聞き手であるYKが対戦表の管理を十分に行えなかったことが、話し手NYのネガティブな感情を生み出し、シフトを引き起こしたと言える<sup>(11)</sup>。

対戦表の管理における難易度を、負荷度に照らし合わせて考えていく。まず、授業は毎週行われているのであるから、普段は管理できているということになる。普段できていることができなかったのだから、学生NYから見た教員YKの負荷度は低いと言える。また、教員として授業を円滑に進行できるのは当然だという学生の認識も、YKの負荷度を少なく見積もる要因となっている。

つまり、負荷度が低いという状況は、ポジティブとネガティブのどちらの感情とも共起し、その感情はシフトを伴って表出されている。

### 3. 2. 情報の提示 — 話し手の負荷度が関与するシフト —

情報の提示は、さらに「確認」と「提供」の二種類に分類できる。情報の提示における確認と提供の違いを簡潔にまとめると、確認とは話し手と聞き手の二者ともに所持している情報の提示のことを指し、提供とは話し手が所持している情報を聞き手に提示することである。つまり、確認と提供のいずれにおいても、負荷度の所在は行動者である話し手側に存在することになるのだが、確認の場面では両者の情報量に差はないのに対し、提供の場面では両者の間には情報量の差が存在することになる。情報の提示という行動に伴う負荷度について考えたとき、情報量に差がない確認<sup>(12)</sup>に比べて、情報量に差がある提供には内面的な労力を要する。よって、確認は総じて低負荷度なものであるのに対して、提供は相対的に高負荷度なものであると言える。これらを踏まえた上で、確認の実例から見ていく。

#### (4) 情報(確認)

- 1 J F ではあの、そのように伝えておきますの／／で
- 2 N T えーっと
- 3 J F はい
- 4 N T (0.4) 全員15名ですが
- 5 J F (0.6) 15人
- 6 J F (1.3) はい
- 7 N T ええ、小学生が14、大人が1人、合計15名の今回予約をしていますが
- 8 J F はい

① 話題：大会の参加申し込みについて、参加人数の確認

② 話者：J F = 競技場職員(女性) 40代後半

NT = 参加申込者(男性) 40代後半

・ J F と N T のスタイルは、丁寧体が基調となる。

この会話における「参加人数が15人」だという情報は、シフト直前の文脈において聞き手NTによって提示されたことから、シフトした場面においてはすでに両者の共通認識となっていた。つまり、両者の情報量に差はないことから、話し手J Fにおける負荷度は低いことが指摘できる。(4)のシフトからは、確認と低負荷度という二つの要素を取り出すことができた。

#### (5) 情報(確認)

- 1 A M I G先生

- 2 AM (1.5) 10分延長するみたいです
- 3 IG (0.4) 10分延長?
- 4 AM はい、50分まで
- 5 AM (1.6) お願いします

- ① 話題：課外プール活動巡回指導中、終了時間変更についての伝達
- ② 話者：AM=部下・先生（男性）20代前半  
IG=上司・先生（男性）20代後半  
・AMからIGへのスタイルは、丁寧体が基調となる。

これも先の例と同様に、話し手AMによって一度情報の提示がなされており、シフトが起きた箇所では、すでにここでの情報は両者の共通認識となっている。つまり、この場面における情報提示に関わる負荷度も低いということになる。

よって、情報の確認という低負荷な場面においてシフトが起きる傾向にあることが分かる。余計なポライトネスを排除し情報だけを切り取ることによって、情報自体に重要性を持たせているのだと考えられる。

続いて情報の提供について、現収集データにおいて情報提供に伴うシフトは発見できなかった。また、先に挙げた情報確認の実例において、シフトの直前に一度情報の提示が行われた際の文脈に遡ったとき、これを情報提供と見ることができるが、いずれにおいてもシフトしていないことが分かる。情報提供は確認に比べて相対的に負荷が高くなることは先に述べた通りであるが、自分だけが知っている情報を聞き手に対しても明らかにすること自体に高い負荷を要することから、シフトしにくい傾向にあるのだと考えられる。

#### 4. まとめ

以上の考察から、丁寧体基調の会話における普通体へのスタイルシフトが起きる条件としては、大きく分けて、①聞き手の負荷度が低いと見なされた場合、②話し手自身の負荷度が低い場合、の二つに分類できた。さらに、①では感情の表出が、②では情報の伝達がそれぞれ見られた。

感情の表出は、前提として話し手が聞き手の負荷度を低く見積もる必要があり、さらに聞き手の言動が話し手にとってプラスなものであるかマイナスなものであるかによって、ポジティブな感情に繋がるか、ネガティブな感情に繋がるかに分かれる。

情報の提示は、会話において最重要な事柄に余計なポライトネスを付加させな

い、つまり同じスタイルを維持するよりも正確な情報伝達を優先させるがゆえのシフトであると言えるだろう。ただし、確認のように話し手にとって低負荷度な情報であることがシフトを引き起こす条件であり、提供のように高負荷度な場合にはシフトしにくいことが分かった。

したがって、シフトを引き起こす要因は負荷度にあり、負荷度が低いという状況が前提として存在しなければ、感情であっても情報であっても普通体へのシフトはしづらいと結論付けられる。

一方で、課題点も複数見つかった。まず、スタイルシフトの研究においては、シフトした箇所を探して分析していくのが一般的であり、シフトしていない箇所に着目することはほとんどない。しかし、相対的に高負荷度である情報提供についてシフトしづらい傾向にあることを示すにあたっては、会話の内容に着目してシフトの有無を確認する必要がある。本稿では、情報確認の直前に情報提供がなされている会話をデータとして取り上げたことで、シフトされていない情報提供にも目が向くようになってきているが、情報提供のみがなされている会話の場合、スタイルに変化が起きないことから見逃してしまう可能性が考えられる。

さらに、本稿では制約を設けないさまざまな会話データを扱うことで、大方全ての場合に当てはまるシフト生起の要因として、Rについて指摘することはできたが、目上／対等、及び、親密／疎遠のいずれにおいてもシフトが見られたことから、P、Dについての傾向は見出せなかった。つまり、P、Dについて言及するには、先行研究（三牧1993、宇佐美1995等）でも指摘されている通り、シフトの頻度について考えていく必要があるだろう。これについては、データ収集の段階でP、Dのいずれかを統制させた上で分析を進める必要がある。あるいは、Rを文脈の中から取り出したのと同様に、一時的シフトを扱うのであれば、PやDについても文脈に沿って適宜判断する必要があるのではないだろうか。幅広い視野からシフトと向き合うためにも、データ収集の手法を多様化させていきたい。

最後に、Rの高低についての基準を明確に設定しなければ、今後高いとも低いとも取れる事例に直面した際にシフトの説明にRをからめにくくなる恐れがあるという点が指摘できる。Rは内面的要因（体力、気力）や外的要因（時間、金銭）といった要素から求められることは先述した通りであるが、さらに必要に応じてRを算出するための新たな要素を見出すと同時に、それぞれを数値化することで、数値としての高さがRとしての高さに直結するようになっていかなければならないと考える。また、基本的には上記のような要素からRを判断することは可能であると考えられるが、要素としても数値としても判別不可能なものについては、見なし負荷度を扱う上での特性を活かし、今後被験者に対するフォローアップ・インタビューを実施することも検討する必要があるだろう。

注

- (1) 宇佐美 (2015) において、丁寧体及び普通体という用語の使用に対する解釈は研究者によって異なることが述べられている。本稿では、丁寧体=デスマス体 (形)、普通体=非デスマス体 (形)、というように文末形式の丁寧度として捉え用語を使用する。
- (2) 陳 (2003) は、「機能」についての分析 (三牧1993等) と「条件」についての分析 (宇佐美1995等) のいずれにおいても「心的距離の調節」の下位分類として「相手への共感を示す」「親しみを表す」が確認できるとしたうえで、これらがスピーチレベル・シフトの果たす機能及び生起する条件のどちらであるのかについて明確にされていないことを指摘している。自身の結論では、「条件」を「状況」という語に改めて論述されている。
- (3) 八つの下位分類は以下の通り。
  - (1) 情報の受信を示す時 … ①相手の発話の一部を繰り返す時、②先取りをする時
  - (2) 情報の整理を表す時 … ③自己発話に対する補足・例示をする時、④情報内容の自己訂正を行う時、⑤何かを思い出しながら話す時、⑥適切な表現を模索する時
  - (3) 感情の表出を行う時 … ⑦相手の発話内容に感嘆を示す時、⑧自分の心情を吐露する時
- (4) 宇佐美 (1995) は、丁寧体を基準とした場合の敬意の低さを表す単位として、常体 (普通体) を一レベルとして位置付けている。
- (5) 厳密には、「スピーチレベル」と「スピーチスタイル」とではニュアンスや捉え方が異なるため、使い分けには検討の余地があるだろう。本稿では、丁寧体と普通体の切り替えが見られる現象について文体の変化として捉えることで、用語を「スタイルシフト」に統一する。
- (6) 同一話者の連続する発話が、+から-、0から-へ移行したものの双方を「敬語使用から不使用へのシフト」として捉えることは初対面場面では当然であるが、-から+、-から0へ移行したものについても「敬語不使用から使用へのシフト」であると述べている。つまり、シフト後に基調レベルに戻る現象もシフトだとしている。また、シフト後のレベル継続についての記述や説明はなされていないが、シフトした文脈までの一連を実例として挙げていることから、レベル継続には着目していないことが指摘できる。
- (7) 会話のポライトネスを決定付ける際には、「現実」の関係がそのまま反映されるとは限らず、話し手の聞き手に対する期待という、「見なし」が関わってくる (滝浦2008)。
- (8) 陳 (2003) でも、従来独語的とされてきた「ダ体発話」について、その背景には情報の処理と感情の表出とがあることが述べられている。
- (9) 使用記号は、以下の通り。本稿では、これら言語外の要素を考察には絡めない。
  - ／／ 同時発話 (オーバーラップ) を示す。
  - 話者以外の個人名を示す。なお、○の個数は発話された文字数に対応させて表示する。
  - ? 上昇のイントネーションを示す。
  - () 沈黙の長さを示す。なお、() 内の数字は10分の1秒単位で表示する。

一 音節の長さ（長音）を示す。

{ } 非言語的行動を示す。

- (10) 「花火をやっていいと言われた」ことによって感情の変化が起きたのではないことは、許可が出た文脈においてはシフトしていないことから指摘できる。
- (11) 「試合ができない」こと、つまりやりたかったことができないという不満も同時に表出したと言えるが、そこだけに着目したのでは負荷度の所在が不明確になる。話し手の不満を作り出したのは聞き手の行動であるから、負荷度は聞き手側に存在するという説明は両者に当てはまることだが、試合ができない精神的ストレスを負荷度と取り違えないように注意が必要である。
- (12) 聞き手にとっては新しい情報という認識になるから、話し手は情報提示の方法（話題を持ち出したり、一から説明したりするなど）を模索する必要性が生じる。
- (13) Pは、例えば宇佐美（1995）のように、目上／同等／目下をそれぞれ比較し、Dは、親密／疎遠あるいはその中間（同僚やクラスメート等）をそれぞれ比較する必要があると考える。
- (14) 一時的な上下関係や親疎関係の形成がシフトに影響を与える可能性についても検討する必要がある。

例：上下関係 … 友人に物を借りる場面（基調となるPは対等だが、一時的に借りる側が目下になる）

親疎関係 … 家族との喧嘩の場面（基調となるDは親密だが、一時的に疎遠になる）

#### 参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- ポリー・ザトラウスキー (1993). 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 三牧陽子 (1993). 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第I部門 (人文科学)』42 (1), 39-51, 大阪教育大学
- 宇佐美まゆみ (1995). 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『學苑』662, 27-42, 昭和女子大学
- 宇佐美まゆみ (2015). 「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』18 (1), 7-22, 社会言語科学会
- 陳文敏 (2003). 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14, 7-28, 国立国語研究所
- 伊集院郁子 (2004). 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6 (2), 12-26, 社会言語科学会
- 滝浦真人 (2008). 『ポライトネス入門』 研究社
- 日本語記述文法研究会 (2009). 『現代日本語文法 7』 くろしお出版
- 酒井智美 (2015). 「スピーチレベルシフトに関する研究—親しい先輩・後輩の会話をもとに—」『東京女子大学言語文化研究』24, 36-50, 東京女子大学